
† SPIRITS †

‡ 3 Bear ‡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†SPIRITS†

【Nコード】

N0896B

【作者名】

†3Bear†

【あらすじ】

『魂は人の力を呼び覚ますために最も重要なモノである』哲学者モルス著『魂』より抜粋

Prologue 時の始まり

Prologue

何気なく平和に暮らせる

幸せ……

『この幸せがいつまでも
続けばいいのになあ……』
少年はつぶやく…

第1話〈all things start…〉

ルークは目覚めた…

『ああ…今日もめんどくせえな…』

最近口癖のこの言葉。

何もしたくない気分だ。

しかし時は過ぎる。

『よし、今日は退屈しのぎに親父の仕事でも手伝ってやるか！』

ルークは少し目を輝かせて
外へ飛び出した。

この街『モールロイス』はかなり平和だ。

ルークのような16歳でも一日中遊べる。

ルークは足どりを早めた

すると、父を見つけた。

何やら真剣な表情で

仕事仲間と話している。

『親父、どうしたんだろうか？』

ルークは少し心配になった
そんな心配をしながらも

ルークは父にそつと近寄り声をかけた。

『おう！親父、仕事はイイ感じ？』

ルークは父がニツコリ笑うところを想像したが
返ってきた返事は暗いものだった。

『ルーク、すまん。今日は大事な仕事なんだ。気持ち嬉しいが、
また今度頼む。』

ルークは少しがっかりしたがしかたなく家に帰った。
その夜…

ルークの父が帰ってきた。
しかしルークは寝ていた…
いや、正確に言えば寝たフリ…だ。

父と母の深刻な話し声が
気になってしかたなかったのだ。

『やっぱり行かなきゃダメなの？？』

『ああ…ホントにすまない…これは今止めておかないと危険な存在
なんだ』

どうやら父は何かを
止めようとしているらしい

母は『無事に帰ってきてくださいね』と
父に言っただけ泣いていた…

そして父はまだ夜が明けたばかりの街に消えていった
ルークは父が気になり、
自分の部屋の窓から
外へ飛び出した。

外は寒い…

少し離れた廃墟の中に
父が入るのをルークは
見た。

そしてルークは廃墟の中で父と黒い服の男が話しているのを聞いた。

『契約は守ってくれたようだな…シーク・オルセーユ…』

シークとは父の名前で
オルセーユは家名だ。
つまりルークは正式には
ルーク・オルセーユなのだ

『契約は守らないと言っているだろう？アクセル。』
ルークは大体状況を理解した。

黒い服の男はアクセルという名前であり、父の敵…

でもなんで父が…？

そうしているうちに

アクセルが動いた。

『ならば死んでもらうしかないな』
アクセルは笑いを浮かべて言った。

そして父に何かで斬りかかった。

ハサミ……

ルークには確かにハサミに見えた。

しかも人の身体より大きな特大ハサミ……

父は剣を使い、一步も譲らない勝負を展開していたが
アクセルのハサミが父の足を見事に深く斬った。

『ぐああ！』

父は痛み能耐え切れず
悲鳴をあげている

『親父っ！！』

ルークは思わず父を助けようとその場から飛び出した
『ルークっ！！来るなあああ！！』

アクセルが父にハサミを
突き立てている。

父はアクセルに殺されてしまうのだろうか……
そんな事させてたまるか……

ルークは力の限り走った。

しかし、間に合わなかった

ルークの目の前で父は

真っ赤な花びらを

撒き散らし死んでいった…

『これで平和は崩れ去ったのだ！私の時代がやってきた！！！！シー
クのカギはまた後で始末すればいい！！』そう言い残して
アクセルは喜びながら闇に消えた…

ルークは堪えていた涙を

我慢できずに流した。

父はアクセルという男を

なぜ止めようとしたのか…

疑問符と涙がルークから

とめどなく溢れ出した…

第2話　旅立ちと過去

朝…昨日の出来事を

忘れさせるかのように

すがすがしく鳥が鳴く。

全ては母から聞いた……

昨日の夜、父が死んだ日…

『母さん…親父が死んだよ…なんでなんだよ!』

『ルーク…ゴメンね、黙っててゴメン…父さんのホントの仕事は「神の民」だったの…』

- 神の民 - …かつて

4大陸時代に今のこの街の基盤となった国家

『神の国レノア』が司る神官の事を指す…まあレノア自体が伝説なのだが…

『神の民?信じられるわけねえだろ!あれは伝説なんだ!!』

『じゃあルーク…なぜルークは人よりも格段に身体能力が高いかわかる?』

母は優しく問いかけた。

『それは………』

ルークは戸惑った…

確かに自分は周りの人に劣っているものがない。スピード、パワー、反応力どれをとっても周りより優れている……どこかがおかしいと思っていた……

母はルークの戸惑いを無視して再び話し始めた

『ルーク…父さんが止めようとしていたのは………「黒組織サイファール」

平和を嫌う好戦的な人々の集団』

『聞いたコトねえな…』

『神の民はもう何の関係もないわ…ルーク、あなたの手で父さんの願いを叶えてほしいの…』

母は少し涙を流していた。

『俺がその変な集団を止めればイイのか…？』

母は何も答えずただ泣いていただけだった…

ルークは昨日の夜を思いだしてしまって少しだけイヤな気分になった…

今日で家とサヨナラだ。

『じゃ…行ってくる…』

ルークは家に向かって
強く手をふった。

そして、幼かった時の
自分に別れを告げた：

まだ旅は始まったばかりだ

第3話 best smiller

どのくらいたっただろう…
歩き続けて3時間…

ルークはくたびれていた。

『まったく…この辺に街ってのはないのか??』

少しイライラしながら
歩いていたルークに

天国のように見えた街があった。

『よっしゃ!! やつとついたぜ!』

街はとても栄えていて
人々の笑顔でいっぱいだった。

ルークも自然と笑顔になった。
久々の笑顔…

自分でわかるほどの輝かしい笑顔だった。
ルークは街人に尋ねた

『あの…ここは何ていうんですか?』

『ここはね、ヤルタっていうんだ、みんな幸せに暮らしてるいい街だよ』

街人は笑顔で答えた。

モールロイスに似てるな…

平和だったが
アクセルに襲われた後、
モールロイスでは魔物が
大量に発生した……

ここは黒組織の連中に襲われていないらしい。

とりあえず宿を捜すことにした。

すると……

ドンッッ！

ルークは誰かと思いきりぶつかっただけ……

『いてえな……気をつけて歩けよ……』
ルークはちよつと不機嫌そうに言った。

『あ、ゴメン。今度から気をつけるよ』そうそう、宿探してるんでしょ？ だったら僕ん家に泊まっていきなよ』
少年はなぜか嬉しそうにしている。

『じゃあそうするけど……』
んで、名前は？ ちなみに俺はルークだ』
とりあえずルークは自己紹介した。

『ルークかあ』カツコイイ名前だなあ』僕はフェルスだよ』
フェルスは輝かしい笑顔をルークに向けて挨拶した。
肩まである長い金髪

蒼い瞳に整った顔

フェルスは見た感じかなりカッコイイ。
言葉遣いだけが…子供っぽい…

ルークは思わず苦笑した。

ルークはフェルスの家で
初めて『魔法』をみた。

フェルスの母・エリーは
魔法使いらしい。

料理も家事も魔法でできると言うのは便利だとルークは実感した。

『フェルス、親父さんはどうしてるんだ？』

ルークは死んだ自分の父をふと思い出し、フェルスの父はどうなの
かが気になった。

『僕の父さんは…死んじゃったよ』

フェルスは笑顔を無くした初めて笑顔が消えた。

『悪かったな…変なコト聞いちゃった。』

ルークは申し訳ない気持ちになった。

『俺の親父は殺されたよ』

『え？なんか悲しいね…』フェルスが暗い顔でさらに話し始めた。

『街の人々は笑顔だけど、ホントは今すごく深刻な事態なんだ……』

『何かおこってるのか?』とルークが尋ねた。

『夜になると魔物がたくさん現れて街を荒らすんだよそして、人々を殺してるんだ...』

辺りを見渡せばもう夜だ。暗い…闇につつまれている
その時…

『うわああああ!』

と人の叫び声がした。

『来た! 僕行かなきゃ!』

フェルスは慌てて外にでていった。

『おい! 待てよ!』

ルークは魔物の怖いところを知っていた…

- - 集団戦法 - -

魔物は集団で人を襲う。

あのままではフェルスが
危ない。

ルークは手入れをしていた剣をにぎりしめて
フェルスを追った……

第4話　dangerous Battlers

夜の風はやけに涼しい…

不気味なほどだ。

ルークは必死にフェルスを追いかけた。

もう誰も死なせてたまるか
あの時走っても父を助けられなかった自分と
今走っている自分が重なった……

そして、ルークは魔物に
囲まれているフェルスを
見つけた。

『フェルス！！逃げろっ！！とにかく走れ！！』

ルークの声は聞こえていない。もし聞こえていたとしても手遅れだ…
囲まれているのだから。

『クソッ！』

悪態をつき、ルークは魔物に向かっていき魔物を1体斬った。

生臭い血が剣にベツトリついている。

次々に斬っていくが、さすがに魔物も抵抗し始めた。するどい爪や
牙がルークに襲いかる。

それを素早くかわして
剣で魔物を刺した。

ルークの反応力は人よりも数段優れている。

ルークは魔物がまたくるかと思い、かまえたが
もう魔物は襲ってこない…
やけにおかしい…

その理由はすぐにわかった
フェルスだ。

フェルスは手に何らかの
能力があるグローブを
つけているのだろう。
魔物をパンチだけで
次々と殴り倒していく。

さらに子供っぽい言葉遣いが変わっていた…

『かかってこい…全員潰す…』

ルークは苦笑した。

さすがに変わりすぎだったからだ。

豹変したフェルスのおかげで魔物は1分で全滅した。
これには驚くしかなかった

『ありがとう』

フツのフェルスが言った
グローブを外せば元にもどるらしい。

『俺のほうこそ助かったよフェルス、強えな。』

ルークは内心感心しながら言った。

『あゝ僕、旅がしたいよ！！この街の魔物の発生原因が調べたい！』

『じゃあ俺と一緒にくるか？』

ルークはなぜかフェルスを旅に誘っていた。

そしてフェルスはOKの返事の代わりに
眩しい笑顔を向けた。

2人は笑い合った…

ルークは仲間というものに初めて出会えて嬉しく思った。

第5話　black-devil man

ルークはフェルスを
仲間にして次の街へ
向かっていた。

意外と近くに街は見つかった。

『よかったぜ！今度は近くにあつた！』
ルークは安堵の表情を浮かべた。

『そうだね♪意外だあ！』
フェルスは子供っぽい言葉遣いで感動している。

街の中は表現するならば
静か…がピッタリだ。

街人もあまり見かけない…
『すみませーん♪ここって何で静かなんですかあ？』
フェルスは軽快に尋ねた。

街人は静かに口を開いた。『この街はノクトン。つい先日黒い服を
きた男が現れて住民を惨殺した…そのせいで皆、怖くなって家か
ら出なくなつたんだ』

ルークは『黒い服』というワードに反応せざるを得なかった。

『おい！その男はどこにいるんだ！？』

街人は困惑しながら

『確か…東にある「月の遺跡」に行くっていったはずだけど。』
と答えた。

『フェルス！月の遺跡に行こう！』
ルークはなぜかやる気が出ていた。
そう…父の敵討ちだ。
復讐のために……

『あ、そうそう、月の遺跡に今リユースが入ってるんだ。よかったら連れ帰ってきてくれないかい？』

街人が頼むように言った。

『リユース？』

疑問を持つのは当然だ。

聞いたことなどない名前。

『リユースは君達と同じくらいの歳の男の子だよ。』

今、月の遺跡に魔物退治に行っているらしい。

なかなか戻ってこなくて

心配なので連れて帰ってきてほしいそうだった。

ルークとフェルスは

黒組織とリユースを捜しに月の遺跡を目指した…

一方………

『ぐっ！こいつ一体！？』

リユースは『魔物』ではなく『人』と戦っていた。

黒い服をまとった男…

『一体誰かだつて？ 答えは簡単。俺の名前はルーシャだよ。』

ルーシャはさらりと答えると、ご自慢の武器 - 鎖つきで両先端に刃がついているカマ - - でリユースを攻撃した。

リユースはそれを避けて

武器のチェーンをかまえた

『火葬鎖「インフェルノチェーン」！』

リユースお得意の妙技…

火葬鎖は燃えさかる炎の鎖が相手を襲う強力技だ。

炎の鎖がルーシャを襲う。しかし、ルーシャは微動だにせず、小さく呟いた。

『デビルカッタスライサー……』

ルーシャのカマが生き物のように、さらに激しくリユースに襲いかかった。

まさに悪魔のようだ…

リユースの鎖はカマによって軌道がずらされてはずれた…
そして……

ザクツツツツ！！！！！！！

ルーシャのカマが左腕にくい込んで刺さっていた…

『ぐああ…』

我慢できない痛みが腕にはしつた。

もうダメかもしれない…
リユースは自分の最期の
姿が脳裏に浮かんだ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0896b/>

†SPIRITS†

2010年12月18日16時11分発行